

## 美ヶ原のテガタチドリ

夏井高人

テガタチドリ (*Gymnadenia conopsea* (L.) R. Brown) とノビネチドリ (*Neolindleya camtschatica* (Chamisso & Schlechter) Nevski (Syn. *Gymnadenia camtschatica* (Chamisso) Miyabe & Kudô)) は、非常によく似た植物だとしばしば言われる。確かに、実物を見ずに図鑑の写真などだけしか知らないと、ほとんど同じような植物に思えてしまう。そのため、日本では同じテガタチドリ属 (*Gymnadenia*) に属する植物として分類するのが普通の考え方となっている。しかし、海外では、最近の遺伝子解析の結果を踏まえ、ノビネチドリをネオリンドレヤ属 (*Neolindleya*) に属するとして分類する考え方が一般的のようだ。同じような例は、ハクサンチドリ属にもある。旧ハクサンチドリ属 (*Orchis*) の属名の由来となったハクサンチドリ (*Dactylorhiza aristata* (Fischer ex Lindley) Soó (Syn. *Orchis aristata* Fischer ex Lindley)) は、現時点では欧州～北米に広く分布しているダクティロリザ属 (*Dactylorhiza*) の植物として扱うのが一般的になっている。その結果、ハクサンチドリは、ハクサンチドリ属ではない別属の植物となってしまっている。このハクサンチドリもまた、テガタチドリとよく似た植物として図鑑等に記載されることが少なくない。

しかし、「百聞は一見にしかず」だ。

実物の花を観察してみると、確かに、テガタチドリ、ノビネチドリ、ハクサンチドリは、それぞれ異なるタイプの植物だということが即座に理解できる。花のかたちだけでなく、自生地とその生育環境が異なっているし、生態も異なっている。

ノビネチドリの自生地として有名な場所のひとつに岩手県の早池峰山がある。私は、早池峰山に登山したことがあるけれども、残念ながらその花を見ていない。しかし、幸いなことに、北大植物園で栽培されているものを間近に観察する機会があり、テガタチドリとは全く異なる植物だということが納得できた。また、岩手県の八幡平でハ

クサンチドリの花を見たことがある。その場所は、黒谷地湿原バス停の周辺で、道端にたくさん生えていた。パイオニア植物といわれる理由がよくわかる。これまたテガタチドリとは基本的に異なる植物だと思う。ちなみに、世間にはミヤマシオガマ (*Pedicularis apodochila* Maximovicz) をノビネチドリと誤認する人もあるようなのだが、多数の個体を丁寧に観察した経験がなければそのような誤認が生ずることも何となくわかるような気がする。

さて、私が自生のテガタチドリと最初に出会った場所は、美ヶ原高原だった。そして、そこでテガタチドリと出会ったことが野生ランとのお付き合いを始める重要な契機だったのではないかと思う。

2005年6月のことだが、信州松本へ用事があって出かけたついでに妻と二人で美ヶ原高原に立ち寄ったことがある。そこで、テガタチドリなのかノビネチドリなのか判別不可能な蕾をつけたラン科植物と初めて出会った。その蕾をみつめながら、「この蕾はどんな花になるのだろうか？」と思ったことを今でも鮮明に覚えている。そして、他にも何か野生植物が生えていないかと周囲を探してみると、ホソバノキソチドリ (*Platanthera tipuloides* (L.) Lindley) が結構たくさん生えていた。そうしている間に、「この私でも自生の野生ランを探ることができる」という驚きと自信とが混じったような不思議な気持ちがわいてきた。以後、ツレサギソウ属 (*Platanthera*) の野生ランもまた、私のこよなく愛する植物のひとつとなった。

自宅に帰宅してから美ヶ原高原の野生ランについて調べてみた結果、「私と妻が見た野生ランはテガタチドリに相違ない」と確信するに至った。それと同時に、開花した状態を観察したいという気持ちを抑えることができなくなった。

以来、美ヶ原周辺を何度も訪問し、そして、テガタチドリの群落と何度も出会うことになった。

テガタチドリは、山野草店で苗を売っていることがある。野生ランの栽培に熟達した人が上手に育てれば暖地の平野部でも育てることが不可能ではない。しかし、テガ

タチドリは、そもそも高山植物であるし、高原のくさむらの中から穂状になって豊かな花を咲かせている姿を一度でも知ると、栽培ではなく自然の状態の花が最も美しいのに違いないという気持ちになる。

その後、子供達にもテガタチドリの群落やその他の野生ランのありのままの姿を見せたくて、一緒に美ヶ原周辺を訪れたことが何度かあった。

山本小屋から「美しの塔」を経て王ヶ頭に向かうなだらかな道の脇にはテガタチドリが生えている。しかし、私が個人的に一番好きなのは、美ヶ原自然保護センターから急坂を上り、ガレ場を経てテレビ中継塔まであと少しというあたりに群生しているテガタチドリが一番好きだ。

ただし、山頂のほうから下りながらその花を目にしてもあまり感動はない。落雷で磁性が狂っているという乾いたガレ場を登り、やっとのことでたどり着くからこそ、生命感あふれるテガタチドリの優しくも力強い姿に心癒されるものがあるのだ。

ところで、近年、遺伝子解析により植物の分類がどんどん変更されつつある。

いずれ、このテガタチドリもまたテガタチドリ属から別属へと分類変更となり、テガタチドリ属の植物が日本には1種類も存在しないという事態に立ち至ることがあるかもしれない。

しかし、植物分類に関する人間の議論や研究とは無関係に、厳しい高山の自然の中でテガタチドリはその美しい花を咲かせ続けることだろうし、ぜひともそうあってほしいものだと心から願う。



*Gymnadenia conopsea*

[参考文献]

Vakhrameeva ほか, 『Orchids of Russia and Adjacent Countries (within the borders of the former USSR)』, A.R.G. Gantner Verlag (2008)